

特別レポート 砂丘と木立—オランダの映画保存の現在

岡田 秀則
Hidenori Okada

海辺のトーチカ

整然と家々の立ち並ぶデン・ハーグ市北部の住宅街を抜けて、車は起伏の多い、海岸沿いの荒地に入ってゆく。北海でも有数のビーチ・リゾートとして知られるスヘフェニンゲン海岸の延長にあるものの、この砂っぽい荒地に立ち入る人影はほとんどいない。やがて、この砂丘地帯の窪みを利用して、隠れるように作られた建物が見えてきた。オランダ視聴覚アーカイブ (Nederlands Audiovisueel Archief、略称NAA)のナイトレート(可燃性)・フィルム保存庫である。世界各国のフィルム・アーカイブは、爆薬同様の危険物であるナイトレート・フィルムの保存場所について、それぞれの地理的な事情に応じた解決法を見い出しているが、このNAAの場合は海辺の「砂丘の中」がその答えであった。ここではフィルムの保存の他、数台の編集台を用いてカタログ化が行われ、データを入力するコンピュータ端末はデン・ハーグの南、ライスヴァイク市にあるもう一つの保存庫の端末とつながっている。保存庫は、職員が働いている隣室とは反対側の壁を比較的弱くしてあり、「最悪の事態」にはそちらへ爆風が逃げてゆく構造になっている。

人家からも海岸線からも距離を置いたこの保存庫は、第二次大戦中に、連合軍の上陸を警戒するナチス・ドイツ軍のトーチカとして建設されたもので、ドイツ占領中は兵士の娯楽施設として利用されていたという。しかし連合軍が結局フランスを上陸地を選んだために戦後もそのままの形で残され、それをオランダ政府が政府関連の宣伝映画、記録映像を収めるフィルム保存庫に改造したという。かつては要塞であったパリ郊外ボワ・ダルシーのアルシーヴ・デュ・フィルム(フランス国立映画センター所属)にせよ、陸軍の戦車学校、アメリカ軍用地という歴史をたどったフィルムセンター相模原分館の敷地にせよ、少なからぬ国々に共通するこのような軍事施設の映画保存施設への転用は、映画というメディアが20世紀全体にわたって波及させてきた「政治性」を象徴的に露呈している。オランダは、監督ヨリス・イヴェンスの名を挙げるまでもなく、その映画史の大きな部分を記録の視線が占めた国である。堅固な施設を築いて歴史の風化に抗する営みがいかにデリケートで政治性を帯びたものであるか、濁った海に臨むこのトーチカもまた、そのことを示すように立っている。現在ここに勤務しているのは、研修生を除けば、記録映画のカタログ化に長年従事してきた常勤職員2名。筆者が面会したエルンスト・ファン・ワインガルデン氏は、現代ヨーロッパ史はもちろん、オランダ領東インド(現インドネシア)で撮られ

た植民地映像を調査する立場からインドネシア語にも通曉した碩学であった。

またライスヴァイク市にあるもう一つの施設は、一転して現代的な外観を備え、コレクションの大半を占める不燃性のフィルムが保存されている。同じくカタログ化を行うため約10人が勤務しているが、ここにはビデオの視聴ブースも設置されており、研究者やテレビ・ドキュメンタリー製作者などに公開することで映像のセールスも行っている。「保存」と「セールス」とを一貫したリンクとして捉えるこのシステムも、フィルム・アーカイブ運営のまた一つの選択であろう。

国内に分散する「ナショナル・センター」

NAA自体は、1997年に発足したばかりの機関である。それまでは、上記2箇所の施設の前身に当たる政府情報局フィルム・アーカイブ(RVD、1990年にFIAF加盟)、ラジオとテレビの放送素材を保存する視聴覚アーカイブ・センター(AVAC)、映画研究財団(SFW)、ラジオ音声や音楽、放送史資料を扱う放送博物館という4つの機関に分かれていた。その性質上、NAAは映画、テレビ・ラジオ番組、音楽、写真などの多様な媒体を国内複数の都市に分散した施設で保存しているが、一つの機関に統合されるまで、すべての映画コレクションが「フィルム担当」のRVDに集約されていた訳ではなかった。前述の植民地映像、オランダ政府の宣伝映画といった重要なフィルムこそRVDに属していたものの、1923年以来オランダの国産ニュース映画としての地歩を築いてきた「ポリホーン(Polygoon)」や、多数の産業映画は、ヒルヴェルス市にあるAVACの所蔵であった。また、20世紀のオランダを形作ってきた3つの勢力(カトリック、プロテスタント、社会主義者グループ)から得た視聴覚資料を用いて、現代史の研究を進めてきたアムステルダムのSFWにも当然多数のフィルムが保存されていた。つまり、オランダで公的に保存されている映画フィルムの総合的な把握は、ナショナル・センターたるNAAの成立をもってようやく可能になったのである。

限られた分野を扱うとはいえ、RVD時代からの努力によって「映画フィルムの専門的な保存機関」という認識を社会の中に根付かせ、省庁間の「壁」をも崩して多様な歴史的映像を収集することは、この小国においても容易なことではない。前述したライスヴァイク市の施設のカタログ化機能も、本年の夏にはヒルヴェルス市(放送博物館などがある)へ移転する予定になっ

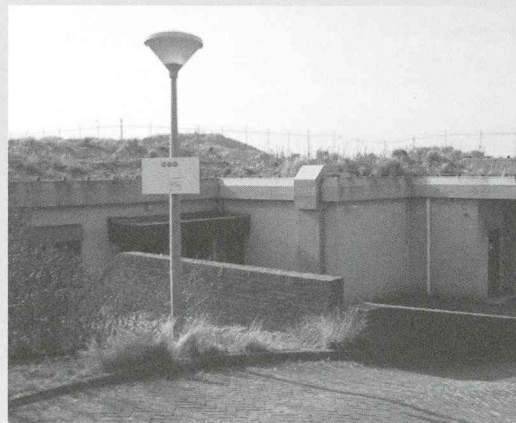
ており、それはNAAという組織が現在も再編の途中にあることを示している。

NAAのフィルム・データベースは、たとえ断片的な映像であっても、そこに映っている人物が誰であり、撮影場所がどこであるかを可能な限り調べ上げ、それをシーン単位で示してくれる(オランダ語で読めないのが残念だが)。そのドキュメンテーションへの執念は、《歴史》との対決以外の何物でもないだろう。寛容な移民政策であれ、安楽死制度であれ、実験的とも言えるいくつもの政策を実践し、新しい社会システムの可能性を世界に発信しているオランダ。その態度は、歴史と直面できるシステムを常に練り上げ、構築してゆく粘り強さと表裏一体であるように思われた。

《映画文化》の殿堂

そして、政府機関たるNAAがドキュメンタリーやニュース映画という形をした《歴史資料》を扱うとするならば、劇映画・記録映画にまたがって《映画文化》を収集かつ保存しているのがオランダ映画博物館(Filmmuseum)であろう。映画博物館は、アムステルダムの西部、国立美術館やゴッホ美術館にもほど近いフォンデル公園の一角に、クラシックな外観を持つ美しい上映施設を有している。アールデコ・スタイルで80席を有するホールと、かつての映画館の内装を復元した84席のホールが2階にあり、また1階の奥には若い客がいつもビールのグラスを傾けているにぎやかなカフェ「ヴァーティゴ(Vertigo)」が開業している。その優雅さ、華やかさはNAAとは対照的であった。その隣には、事務所とインフォメーション・センター(図書室)とを兼ねたビルがあり、比較的開架図書の率が高いインフォメーション・センターでは、映画にかかわる新聞記事をコンピュータ端末で見ることができる他、貴重な資料のための特別閲覧室が設けられているのが大きな特徴である。

映画博物館は、1970年代に政府の出資を受けるようにはなったが、今も私立のフィルム・アーカイブとして活動を続けている(その歴史やコレクションの内容については「NFCニューズレター」第34号の「オランダ映画博物館について」をご参照ください)。ヨーロッパでも最高



オランダ視聴覚アーカイブの可燃性フィルム保存庫 (デン・ハーグ)

級の復元技術を誇る現像所ハーゲフィルムと協力して行われる、そのフィルム復元事業はすでに国際的な評価を得ている。キュレーターのマーク＝ポール・マイヤー氏は、1910年代の作品を大量に含む世界的にも貴重な映画コレクション「デスメット・コレクション」を含め多くの復元事業を担当してきたが、昨年12月にフィルムセンターが上映した一連のオランダ無声映画のフィルムによって、その仕事の質の高さは日本でも確認されている。

さて、フィルムの保存やカタログリングは、アムステルダムから自動車で40分ほどの距離にある町オーファーフエーンの森の奥にある、映画博物館の分館で行われている。ハーレム市の西方にあたるこの場所はすでに北海沿岸に近いが、森の中にいる限りは潮の香りもせず、海を感じさせるものは一切ない。ここから海岸の



オランダ映画博物館 分館（オーファーフエーン）

町ザントフォールトまでは高級住宅が立ち並ぶ物静かな地域である。敷地にはこれまたかつてトーチカだったという可燃性フィルムの保存庫があり、さらに邸宅を改造した二つの建物を作業所（可燃性フィルム用と不燃性フィルム用）として使用している。これらの建物からは、フィルム調査のために細心の注意を払う職員たちを慰めるように、放牧された馬の群れや薄明るい木立などの風景が広がっている。またここには、機材類が保存されている他、実際のフィルムがチェックできるという利点から映像セールスの部門も置かれている（なお付言すれば、不燃性フィルムはこの敷地にはなく、自動車で20分程度の距離にある民間の倉庫を映画博物館専用として使用している）。

「博物館」を超えて

さて、映画博物館の活動を考える時に注意しなければならないのが、この機関が単に映画のアーカイブ活動のみを目的とするのではなく、オランダにおける総合的な映画文化の振興を担っているという事実である。それを端的に示しているのが、配給部門の存在であろう。芸術としての映画を振興する立場から、大手系列の映画館（オランダではパテ社が強力な興行網を持つ）にかかりにくい外国映画を、この博物館の他、ロッテルダム、デン・ハーグ、ユトレヒトなど地方都市の非営利施設を巡回させて積極的に公開している。新しい日本映画の紹介も盛んであり、筆者らの訪問時には

青山真治監督の『EUREKA（ユリイカ）』（2000）やサブ監督の『MONDAY』（2000）が公開を控え、試写会も行われていた。

従って、博物館のホールで日常的に上映されている映画は多岐にわたる。ある日曜に例をとると、夕方には、無声期ヨーロッパのスター女優特集（ピアニノ、時にはジャズ・グループの演奏が付く）とチュニジア映画『ある歌い女の思い出』（1994、ムフイーダ・トゥラトリ監督）の上映が2館で並行して行われ、さらにレイトショーとしてベルナルド・ベルトルッチの『ラストタンゴ・イン・パリ』（1972）が数週間公開されるという具合に、古典的な名作、アート系の新作、リバイバル上映が入り乱れたラインアップになっている。このプログラミングを一瞥しただけでも、映画博物館の活動の重点が、前号で紹介したベルギー王立シネマテークや日本のフィルムセンターのそれと随分異なっていることが理解できるだろう。昨年1月にホース・プロートキャンプ氏が退任した後、映画博物館の館長職は空席となっていたが、ようやくこの3月中旬にハーゲ・フィルムハウスの館長リーン・ハーヘン氏の就任が発表された。デン・ハーグ市の中心街にあるハーゲ・フィルムハウスもまた、映画博物館の配給作品が上映される重要な施設の一つである。映画文化の普及という、アーカイブ活動を越えた試みをも支える映画博物館の責務は、ますます重いと言わねばなるまい。

さらに、こうした事業を支える国内の映画ジャーナリズムとして、月刊のタブロイド版映画ニュース「フィルムクラント（Filmkrant）」や雑誌「スクリーン（Skrien）」が発行されている。「フィルムクラント」は広告収入によって無料配布を維持しているが、「スクリーン」は政府の資金援助を受けている。映画文化を歴史的、総合的に取り扱うという使命を帯びながらも、新作紹介などの時事的なトピックを折り混ぜて購読者数を維持しているというのが現状だという。

オランダ映画界の誇り、ハーゲフィルム

そして、これら2つのフィルム・アーカイヴが、仕事の上で絶大な信頼を寄せているのが、アムステルダムの南の外れにある現像所ハーゲ（ハーヘ）フィルム（Haghefilm）である。ハーゲフィルムの特色は、フィルムの復元を専門とし、その技術で国際的な知名度を得ているという点である。現在はオランダ唯一の映画現像所シネコ社（Cineco）に吸収され、その一部門として活動を続けているが、国内のNAAと映画博物館の作業を一手に受け持つばかりか、ヨーロッパ各国のフィルム・アーカイヴ（時には大



オランダ映画博物館の上映施設（アムステルダム）

西洋を越えたジョージ・イーストマン・ハウスからも）、政府、個人収集家からの発注を受けている。経年変化で縮んだフィルムにも対応するデブリー社製の特殊なステップ・プリンターを持ち、^{ステンシル}彩色フィルムはもちろん、映画博物館との連携によって17.5mm、28mm、68mmフィルムといった映画技術史上のマイナーなフォーマットの復元にもすでに着手している。フィルム素材の比較研究も進んでおり、例えば彩色フィルムの復元には、富士フィルム製品を使うのが最適との結論に達したという。

長らくハーゲフィルムには、各国のフィルム・アーカイヴが篤い信頼を寄せていた技術責任者ヨハン・プライス氏がいたが、昨年、他の復元プロジェクトに取りかかるため同社を離れたという。マイヤー氏はそれを大きな損失であると述べていたが、今後もハーゲフィルムの高い技術水準を維持することは、単に一企業の問題ではなくヨーロッパ映画界全体の課題でもある。

前号で述べた、隣国ベルギーのシネマテーク活動が映画の収集システムに独自性を見せるとすれば、オランダの映画保存は、ハーゲフィルムの存在からも分かる通り復元のインフラやシステム作りに強い特徴を見せている。しかしながら、ごく初期のオランダ映画、例えばミュレンス兄弟の記念碑的な『ザントフォールの浜辺でズボンをなくしたフランス紳士の災難』（1905）の復元活動を、映画博物館はことさらに宣伝する訳ではない。それはフランスやベルギーのような、社会における映画の《威信》を高めるという発想とは異なり、むしろ20世紀全体にわたって映画が社会の《友人》であったことを強調しているかのようだ。こうして社会に寄り添いながら、自らを積極的に外に開こうとするこの国のフィルム・アーカイヴ活動は、歴史に威厳よりも未来へのプラクティカルな教訓を求める現代オランダ社会の反映なのかも知れない。■